



信心のうた 親鸞聖人の和讃

浄土真宗の宗祖と仰ぐ親鸞聖人がお生まれになったのは今の季節、爽やかな風と緑が薫る5月です。鎌倉時代に90年の生涯を全うされたということは、大変な活力の持ち主であったことと偲ばれます。

幼くして両親と死別され、9歳で得度され比叡山で「生死出べき道を求められ」20年、29歳で法然上人の説かれるお念仏のみ教えと出合わせ、親しくみ教えを聞くよるこびを得られましたが、「念仏禁止令」により越後へ流罪。許された後も関東で家族とともに非僧非俗のお念仏のみ教えに生きられました。60歳の頃帰洛され亡くなるまで、仮住まいのまま、ただ仏恩の深きことをよるこばれ、正しくみ教えが伝わることを願って著作に没頭されました。著書は教行信証をはじめ、特に4百首ものご和讃は、「門信徒のご本典」と称され、浄土真宗に欠くことのできない大切な教えが私たちにも易しく親しまれるようにうたわれています。

**善知識にあうことも
おしうることもまたかたし
よくきくこともかたければ
信ずることもなおかたし**

(大経和讃)

「知識」とは、今私たちが理解する知識ではなく、教えの導き手のことで「善」をつけ「善知識」とよんでいます。

善知識は英語でgood friend（良い友達人）と訳されているように、私を仏さまの教えに気づかせてくれた「良い友達」という意味です。それはご縁の賜物ですから、私の善知識が必ずしも他の人々の善知識であるとは限りません。ということは、自分にはそう思えない人でも、誰かにとっては善知識でありうるということに思い至ることがなければなりません。

それは、古来より「先立つ我が子は善知識なり」との言葉で語り継がれているように、早く亡くなってしまった子供であったり、時に苦勞させられた家族であることもあります。しかしそれは、「そう思いなさい」と悲しみの中にある人に善知識を説き聞かせるものではありません。お念仏のみ教えを聞く中で、気づいてみれば「善知識だったなあ…」と自ずから頷け、この世の無常が身にしみて味あわれ、「善知識となってはたらいてくれている」と領解されるのです。ですから、「おしうることもまたかたし」なのです。

「もったいない」という言葉と同様に、善知識も人に説くことも伝えることも難しく、必ず、私の、や、私には、などのように、「自分にとって」

という以外にはなく、教えたり諭したりして得るものではないのです。

宗教的体験は理屈や社会的常識的な言葉を越えたものですが、一気に頷けるときがあります。それは「聞いていたのはこのことだった」と自分自身がそのご縁にあったときです。ですから念仏者の行は「お聴聞」と言われるように、聞き続けるのです。それを「よくきくこともかたければ」と、私たちが自分なりの思い先入観なしに、心を空っぽにして聞くこと、聞き取ることも難しいと説かれているのです。

そして、「信ずることもなおかたし」は、努力して一生懸命に信ずることを信心だと思っていますが、親鸞聖人の信心は、むしろ疑いのない心、疑いという煩惱を混えない心の難しさを常に内省され続ける人の「信心」です。

そのような「何事もなりがたい凡夫」の私が、今まで気づかなかったものごとに気づき、新しい世界に目覚め、「おかげさまで」という言葉が出ることも、恵まれてあった「慈悲」に気づき「なるほどそうだったなあ」と頷けるのも、自分の努力ではなかった、お念仏・南無阿彌陀仏の智慧をいただいていたおかげなのです。どうぞお聴聞下さい。 合掌

奏庵法座
親鸞聖人降誕会

日時
5月26日(土)
午前11時～

「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

親鸞聖人がお生まれになった頃の日野の里には、新緑のたくましさ到我が子の将来を重ねられたらうご両親のお喜びが目浮かぶように美しい風景が広がっています。「父母の孝養のためとて念仏したことはない」との親鸞のお言葉にこそ、ご縁の短かかったご両親も間違いなく聖人の善知識であったことが味あわれます。その思いを偲ぶ降誕会です。どうぞお参り下さい。



俳句ブームにのって
「きょうの一句」
(ラジオ深夜便より)

霞草活けて心を
ひたかくす

朝倉和江
季語 霞草(晩春)

衲して山ほととぎす
ほしいまゝ

杉田久女
季語 ほととぎす(三夏)

ゆきのした
かるがる咲いて
はなやげる

渡辺水巴
季語 ゆきのした(仲夏)

ご報告

以前法話の中に書いた、介護の「保護猫」を4月末に看取りました。

地域猫でしたが、この谷戸に親しみ地域の人々の情に素直に甘え、庵を住処にして命を全うした姿に、世話になる生き方を教えられたようでした。これまでに看取った猫や犬たちと庵のお墓に眠りました。キャットフードを送って下さったり、お心遣いのカンパをいただきましたこと、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

人間にとって「記憶」とはいったいどういう存在なのだろう。政治家や官僚、事件の犯人や該当者が、都合よく思い出したり忘れてたりするのに対し、我々高齢者の、固有名詞や言葉を思い出そうとしても度忘れする、思い出せない、少し前に聞いたことや、しようとしていたことを忘れるような、自分自身や身近な認知症の人の、いたし方のない衰えに翻弄させられる日々につけ、本来の「記憶」というものが悪利用されるのが許せないような気がする。■2時間サスペンスでは犯人がアリバイのため列車の番号や座席番号をスラスラ答えるが、自分は今乗ってきた飛行機のフライトナンバーも座席番号も覚えていたためしがないが、固有名詞は思い出せないのに、それにまつわるエピソードは覚えていたりする。記憶には、忘れずに覚えておくことのほかに、それを保持し、さらに後で想起こすすること。将来の行動に必要な情報を、その時点まで保持することも含まれるが、彼らにとっての記憶とは、我々のような「思い出」に変わるものではなく、出し入れ可能な利用価値が優先するものようだ。■我々は近い過去から忘れていき、昔のことは何とか覚えていて、思い出をたどるのはお金もかからず、独りでもでき、嫌だったことは頭の隅に置いておき、快い思い出は膨らますこともでき、苦労も過ぎればよい思い出だ。それを時々、同レベルの兄弟や幼馴染と共有出来れば嬉しい。時代がどんどん昔へ戻っていくのは、衰えゆく者の防衛本能が作り出す安心と幸せであり、認知症になれば、その多くの時間を楽しく美しい記憶の中に居られると思いたい。■国会答弁や事件などで語られる「記憶」というものは、その時に必要か都合悪いかで、思い出したり消したりできる「嘘」であって、「思い出」に変わったものではない。だから野党が証人喚問などを要求して実現したとしても、それははなから信用できず無意味に終わるだけだ。そんな彼らにもいつか少なからず認知症が見られることだろう。そのとき彼らがたどる記憶には、楽しく美しく、誰かと喜びあうものがあるのだろうか。 Norimaru